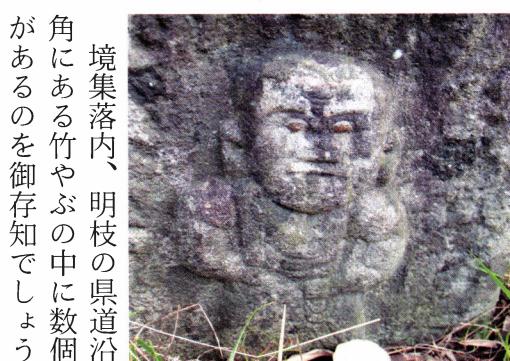


昔の子どもにはよくイボが発生したもので、元の老人に、「いぼ地蔵さんに伊ボがとれるようにお願いしたら」と言わせて行つたところ、数日後に治り消えていました。



（平成十一年八月発行
館報あまつ六六号より）



境のいぼ地蔵

はつかさん

第14号 発行 天津地域振興協議会 総務企画部編集委員会 印刷 米子ワークホーム

ました。（実際には、祈る時花立ての水を二～三滴イボに付けてお願いした）誠によく効き目がありました。

最近の子どもにはイボがあまり出ず、また出た時はお医者さんに掛かり治すようになりました。そうしたことから、いぼ地蔵伝説は何十年も忘れ去られ、現在では祈願する人もなく、竹やぶの中にひつそりと佇んでいます。

今では、民間説話から語り継がれた、昔話にしか感じることがでません。

境集落内、明枝の県道沿いの一角にある竹やぶの中に数個の石碑があるのを御存知でしょうか？

この中に「いぼ地蔵さん」と呼ばれる石像が祀られています。

地蔵さんの伝説については、先祖からの「云い伝え」「いぼ地蔵さん」、又は「いぼの神さん」とか言われていました。

また、地元でもあまり知られていないこんな説話があります。

「会見郡札所めぐり」の一説に、境集落内、観音堂への上りに、「目の神さん」と呼ばれる石造物がある。

これは、黒っぽい石に不道明王が浮き彫りにされていて、不思議なことに目が白い蓋のようなもので覆っている。大正の初め頃までは川向こうにあったそうだが、河川改良や道路修繕の為現在の所に移されたようです。地元でもここに目の神さんが祀られていることを知っている人は少なくなっています。と書かれています。

現在、「目の神さん」と呼ばれていた地蔵さんの事を知る人はなく、「いぼ地蔵さん」が昔「目の神さん」の愛称で呼ばれていたのか、又は他に地蔵さんがあったのかは分かりませんでした。

昔の人は、イボに限らず治りにくい病気にかかると、神仏への祈禱やまじないをやれば治ると信じていたので、地蔵尊や薬師如来像を祀つて祈願する風習が広く各地に普及した。「とげぬき地蔵」や「夜泣き地蔵」「脚氣地蔵」などもその例である。

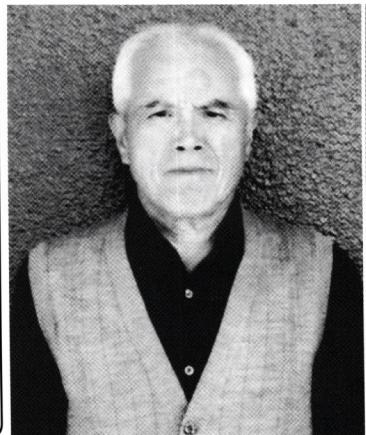
地蔵はある世とこの世の境にあって、冥土に赴く者を救うとされていたが、現世の人々の苦悩を救つてくれるとも云われていたので、こうした地蔵を祈願する風習が全国に広がった。

いぼなおし地蔵

全国各地に「いぼ地蔵」につわる云い伝えがある。

イボとは、皮膚にできる丸い小突起物の事である。一種の皮膚病で、現代では病院に行ったり、ハトムギを煎じて飲んだりして簡単に治すことができるのだが、治療薬が発見されていかつた昔は、一つできると次々に数が増え、なかなか治りにくく、頑固な出来物だった。痛みはないが、気味の悪い厄介な皮膚病とされ恐れられていた。

あ
の
人
こ
の
人



小説で鳥取県文芸賞奨励賞を受賞されました四季の大泉 英夫さん

自己陶酔の登山記録

手元に登山記録がある。A-15判、厚さ4cm、昭和三十二年十二月発行、定価三百五十円である。（週刊誌二十円の時代）仕事に就いて日もまだ浅く、薄給の身には、狂気とも言える高値の華であった。

どんな気持ちで手にしたか、今もつて不明である。日記は三十年で二冊目にバトンタッチしたが、それも既に二十五年になった。いやや、この長き記録には、自己陶酔も中途半端ではない。内容的には、震撼させられる大事故もあり、悲喜こもごもである。劍岳では雪渓を滑落して、岩に激突、大きなリュック（35kgの装備）に命を守られた。

なあ、大泉さんの小説は、興味のある方はぜひご覧ください。
十二月四日から各書店で販売しています。



大山の頂上にて

さて冬の到来である。会では冬眠などしない。登りたい人、この指たかれ。
（大泉 英夫）

Uターンして「低山を登る会」を立ち上げて十年になる。会員の出入りはあったが、例会は、ほぼ毎月実行されて、六月には百回記念を那岐山で祝った。

大阪の天王山では雀蜂に二十ヶ所も刺されたが、辛くも無事を貴った。それでも登山への気持ちが萎えなかつたのは、山が好きの一言であろうか。

思えば今の私、余禄の人生か？

Uターンして「低山を登る会」を立ち上げて十年になる。会員の出入りはあったが、例会は、ほぼ毎月実行されて、六月には百回記念を那岐山で祝った。

さて冬の到来である。会では冬眠などしない。登りたい人、この指たかれ。
（大泉 英夫）



毎年恒例 しめ縄づくり



花回廊で記念撮影

清水川いきいきサロン紹介
しみず会

いきいきサロン『しみず会』は平成十三年、会員二十名で発足しましたが、現在わずか十名となり皆さん後期高齢者です。

元気いっぱい生きるために心構えや知恵を学び、人生を健やかにする習慣を身につけるため年間を通じ次のような活動をしています。

①私たちの村を語る。

（地名の由来、屋号、古事記清水井など）。②有識者を交えた勉強会。③町外へお出かけ研修会。④南部町ふれあいバスや緑水園バスを利用して、町内の未知の集落巡回。⑤ビデオ、DV D鑑賞。⑥正月締め縄づくり（会員外も参加）。⑦室内で軽スポーツ。⑧公民館障子張替え、屋内外の掃除。⑨点取りゲーム（景品付き）。⑩その他会員の要望。

清水川は人口九十五名、その人口の45%が六十歳以上という少子高齢化集落、サロンしみず会の会員も加齢、病弱などの退会による自然現象は避けられません。そのような現状がいつまで続くのかそんな危機感を絶えず意識しています。

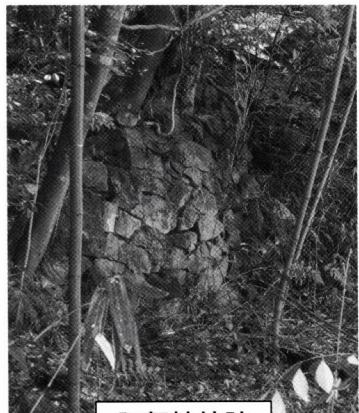
（世話人代表 大塚 明夫）

山の中の史跡

昔の子どもは、よく山中に入り色々な経験をしていましたと思いますが、今は本人にとって入る必要がない、親が入らせないなど、今後どんどん山に入ることはなくなつてくると思われます。

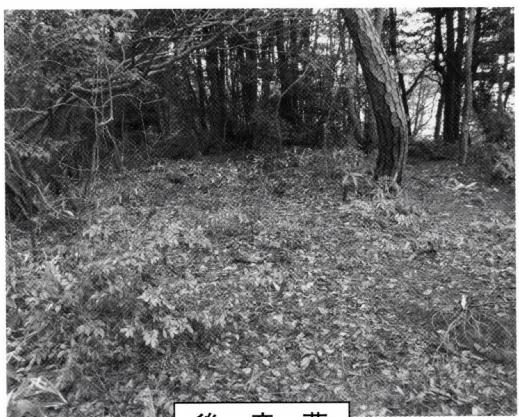
そこで、平成二十三年十一月三日の文化の日、よく晴れて山歩きに絶好の天候の中、六人の有志で上阿賀の山中の史跡を確認しに行きました。

まずは、山に入つてすぐにある阿賀神社跡。西伯町誌の九十四ページには中近世の部落信仰が掲載されており、上阿賀は王子が記載されています。阿賀神社はこの王子権現を祀つており、阿賀神社のあつた場所は小字名が王子塔山です。大正六年（一九一七）四月に倭の賀茂神社に合祀され、今では建物はなくその石垣しか残つていません。



阿賀神社跡

二つ目の高圧送電線の鉄塔を目指し尾根にたどり着くと反対側には法勝寺の新宮谷が広がつています。鉄塔を横切り百メートルくらいのところ、救命山にある木野山さんに到着。木野山さんは、明治九年を皮切りに中国地方に猛威をふるつたコレラ病に格別のご神威の発揚があつた岡山県の木野山神社から、明治十年頃、秦富藏さん（秦壽昭さんより五代前）が勧請して帰られ、始めは下阿賀の地内に祀られていたのを、後に救命山頂に祀り替えられ、昭和四十年の前半頃まで、毎年四月十六日に宮司ともども両阿賀より人が山に登り、籠もりを行つていました。

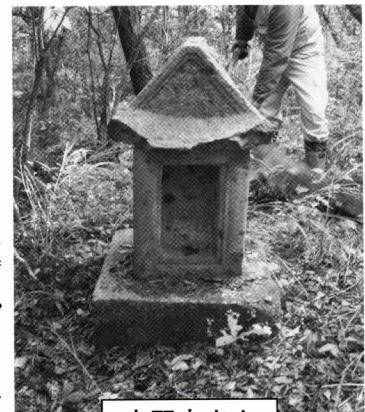


後産墓

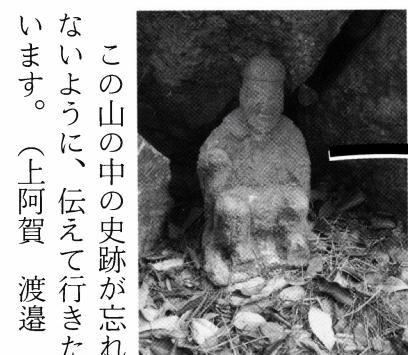


じんむさん穴

救命山から引き返し、じんむさんの穴へ。じんむさんの穴は、貴大國の原集落の竹本さんが籠つたと伝えられています。今では、籠つたと言われる穴も崩れてしまっています。



木野山さん



役の行者

この山の中の史跡が忘れ去られないよう、伝えて行きたいと思います。（上阿賀 渡邊 悅朗）

最後に、行者さんに向かいました。行者信仰は、江戸時代以前のもので山岳信仰に天台宗・真言宗の密教的因素が習合したもので、上阿賀の行者さんは大小様々な岩の祠に石像が祀つてあり、戦前までは両阿賀の人々が山に籠り、行者信仰が行われていたと聞きます。現在でも石像の近くには、当時祭式が行われていたと思われる広場の跡がその名残として残っています。



谷川の子どもたち

（福田神社の神輿）

子ども会行事で一番賑わう日、
福田神社例祭が今年もやってきました。
前日の宵祭りから子ども達
は大活躍！今年はみんなで歌を歌
い祭りを盛り上げました。

谷川の子ども会は、現在七軒九
人と少なくなりましたが、宵祭り
となると、杉の子会（就学前の幼
児）も、嫁いで行かれた方の子ども
もも参加され、やっぱり谷川の祭
りだけは出なきやという気持ちが
伝わり嬉しく思います。

次の日は、太鼓を出し、神輿を
担いで「わっしょいわっしょい」
と谷川集落を回り福田神社まで行
きました。スタート時、雲行きが
怪しく心配していましたが、今年
も力いっぱいできて、子ども達も
嬉しそうにしていました。

この子ども神輿も、子どもの減
少により子ども会だけで担ぐのが、
年々難しくなってきますが、
集落のたくさんの方が協力して下
さるのでこうして継続していく
のだと思います。

谷川は、どの世代も和氣あいあ
いと仲良く楽しい集落です。これ
からも、子ども達と楽しい思い出、
居心地の良い谷川集落を作っていく
きたいと思います。

（集落長 野口 幸司）



出逢うなり、いつも「どげな、
まめなかや」と言って下さる人
もいます。いくら気分の悪いときでも「まあ、やんばいですか
い」と答えてこちらもつい笑ってしまいます。

我が家の前、小路ですが通学の生徒、児童がよく通ります。こちらから声掛けをするとようやく返事が返ってくる、というくらいの感じでしょうか。

ときたま、自分から先に明るい挨拶をする子を見掛けます。何やら感激します。こんな子にはお年玉でもあげたいなあ、と思ってしまいます。

では、皆様、良いお年を。（野口 賢治）

編集後記

「あいさつ運動」、ボランティアや有志の人が校門、道端に立つて生徒らに声掛けをしています。良い活動ですね。挨拶の習慣が身に付いて欲しいものです。いつも見掛けられるけれどあまり知らない人、というのはよくあります。でも、一言二言声掛けをしてみると案外にうち解けることが多いようです。「今日は寒いですねえ」。別に言われなくても分かり切ったことでもその一言で心が通います。